小学校

震災から五年がたって…

白石市立白石第二小学校　六年　矢久保　寛菜

私は一年生のときに震災を経験しました。震災は、すごくこわかったです。でも、こわかったこの震災から学んだことが二つあります。

一つ目は、協力することと、人々の絆が大切だということです。ゆれがおさまり、校庭へひ難したら、こわくて泣く人がたくさんいました。私も泣きました。でも、泣かない人もいました。私は、泣かない友達を見て、がまん強く、心が強いなと思いました。それに「大丈夫だよ。おうちの人がむかえに来てくれるから。」と、はげましてくれました。そのおかげで、少しれいせいになることができました。これは、絆があったから、協力してなぐさめ合えたのだと思います。

二つ目は、ボランティア活動をしてくれている人々のそんざいです。まだ停電中で，水も出なかったとき、近くに一台のトラックが来ました。たまたまその近くを歩いていたときに、そのトラックの運転手さんに声をかけられました。なんと、灯油やガソリンはいりませんかと言われました。ガソリンスタンドに何時間も並ばないと手に入らなかった灯油やガソリンをくれるなんて、すごくいい方だなと思いました。私の家には、ストーブがあり、だんぼう器具は、ストーブだったので、灯油を使います。なので、灯油を少しいただくことにしました。その方は、ほかの人たちにも配っていて、すごいボランティアさんだなと思いました。あの方のことは、一生わすれられない思い出であり、あこがれの存在になりました。いざとなったら助け合い、ボランティアとして自分にできることをするということを学びました。いつか、私もボランティアをする機会がきたら、小さなことでも恩返ししていきたいです。

震災は、人々にとって不幸をもたらしました。しかし、残った人々には、生きるために大切なこと、この先、また起きたらどうすればいいのかを教えてくれたと思います。

今もまだ仮設住宅に住んでいて、わが家に帰れない、もどれない人々がたくさんいます。とくに福島県では、原発のえいきょう、宮城県、福島県では、地しんによる津波のえいきょうが一番の理由だと思います。まだ仮設ぐらしをしている人々のためにも、五年がたった今、自分にできる事を考え、少しずつ行っていきたいと思います。

あの時から今の自分へ

角田市立桜小学校　六年　佐藤　芙弥

私が一年生の時に、東日本大震災が起きました。その時、私は友達と遊んでいたのです。そろそろ帰ろうとした矢先に、地震は突然、大きな揺れとともに、私の前に現れました。それが悲劇の始まりでした。

小学校では、早くも児童の引渡しが行われていました。運がいいのか、お母さんは、その日仕事が休みで、早く迎えに来てくれました。そして、兄と私は帰宅すると、机の上がぐちゃぐちゃになって足の踏み場もないほど散らかっていました。そのとき、外からサイレンが聞こえました。外に出てみると、不思議なことが起きました。なんと、しょっぱい雨が降ってきたのです。兄と祖母は、これは津波だと言って、心配そうな様子でした。

あわてて食料や貴重品を持ち、避難所に逃げました。母が、

「津波はどこまできていますか。」

と避難所に逃げてきた人にたずねると、

「浜吉田郵便局まで来たそうですよ。」

と教えてくれました。私たちの町の半分に津波が押し寄せていました。

暗くなり、不安な夜がやってきました。父が、私たちの避難していた自動車を見付け、

「みんな無事だったんだね。よかった……」

と声をかけました。私もほっと安心しました。

しかし、眠れない夜が明け、避難所になった小学校から、下の様子を見おろすと、そこは津波がまだ引いていないために、町全体が海のようになっていました。その日に、角田市在住の祖父と祖母が、私たちを迎えに来て、一足先に角田市に避難をしました。母は、津波が引いたので、一時帰宅し、家の様子を見に行きました。母から、

「近所で飼っていた犬が亡くなっていたよ。」

と聞き、私はショックを受けました。幼い頃から一緒に育った犬だったので、悲しい気持ちになりました。

角田市に避難していると、父から

「亘理の小学校に戻るか、それとも転校するか。」

と聞かれ、私はなぜかぱっと答えが出ました。

「新しい学校に転校したい。」

と……。私が今思うことは、それは神様からの導きだったかもしれません。現在、私は六年生です。今の自分があるのは、両親のおかげだと思います。いつも送迎をしてくれる母。少し恐いけどいつも大黒柱で家族を支える父。成長するにつれ、家族の支えが実感できるようになりました。

震災の体験や家族の支えから、私は看護師になりたいと思うようになりました。震災のときには、人のために一生懸命働く人たちがいました。そして、私には心の支えになってくれる両親の存在があります。私は、この人たちの姿から、人の命や心を支える看護師になりたいと思います。

心のつながり

角田市立西根小学校　六年　長谷川　翔大

「がんばっておどるぞぉ。」

西根小の運動会の練習がいよいよ始まりました。六年生は、四年生，五年生をリードしながらソーラン節をおどることになっているのです。おどりは毎年ちょっとずつちがっていて、プログラムの流れもいろいろ工夫されます。ぼくは、ソーラン節のふり付けがどんなものになるか楽しみにしていたし、できれば大漁旗とかがあったらますますかっこいいなぁと思っていました。

「地域の人に認められるように、全力を出し切ろう。」というめあてを立て、ぼくたちは毎日一生けん命練習を続けました。おどりをだいたい覚えたころ、先生がぼくたちに、

「大漁旗が届いたよ。」

と伝えてくれました。ぼくはびっくりして、「どこどこ？どんな旗なの。」という気持ちでした。ぼくは大漁旗を見たことがありません。早く見たくてどきどきしながら、ふくろから出された旗が広げられるのをじっと見つめていました。小さくたたまれた布が開かれていくと、ぼくの目もどんどん大きく開かれていく感じがしました。赤や黄色、緑、青、いろいろな色が目にとびこんできます。でっかい魚も描かれていて、「なるほど、これなら海での漁にぴったりだ。」と思いました。なんだか急に気持ちが高まって、今まで以上におどりに気合いが入りそうに思えます。「必ず成功させてやるぞ。」と力が入りました。

でも、ぼくには一つ疑問がありました。

「これってどこから来たんだろう。」ということです。先生は、ぼくの疑問が聞こえたかのように答えてくれました。

「これは、塩釜市にある浦戸小中学校からお借りした大漁旗です。きっといろいろな苦労を乗りこえてきた旗だと思うよ。」

震災から四年以上が過ぎ、ぼくたちは毎日当たり前の生活を送っていますが、ふと、そのころのことが頭に浮かびました。西根地区は山の方なので津波のひ害などはありませんでしたが、今回大漁旗をお借りした浦戸の島はどうだったのでしょうか。テレビでみた様々な場面が思い出され、ちょっとこわい思いがしました。ニュースでは、今でももとの生活にもどれずにいる人たちがいることが報じられています。ぼくは浦戸のことがよくわかってはいませんが、海の近くの人たちが、震災のあと、復興のためたいへんな努力をしていることは知っています。復興のため何かできるわけではありませんが、大漁旗を見ていると、がんばっている人たちのために、精いっぱい応援したいという気持ちがむくむくとわき上がってきました。

次の日の練習では、あの大漁旗が登場しました。そして、ぼくたちのソーラン節には新たに「絆」というテーマがつけ加えられ、被災地でがんばっている人たちにエールを送るため、ぼくたちは本番で全力でおどり切ることをちかいました。

震災をふり返って

七ヶ宿町立七ヶ宿小学校　五年　佐藤　花音

東日本大震災からもうすぐ五年が経とうとしています。当時、私はまだ小学校に入学する前で、保育所に通っていました。大地震が起きたしゅん間、私は保育所でお昼ねをしていました。急にグラグラとして起きてみると、ものすごい地震でした。棚から本やぬいぐるみが落ちてきてあわてて避難をしました。夢中で外に出て、気が付くとはだしで雪の上に立っていました。とてもこわくて、泣きそうになりました。しばらくすると、おじいちゃんがむかえに来てくれました。

家に着くと、本棚やタンスがたおれていて、とてもショックでした。不安になって泣いていると、お父さんが帰ってきました。お父さんの顔を見ると、ますます泣いてしまいました。家の中は暗くて、ごちゃごちゃになっていたので、お父さんの車の中に避難しました。すると、となりの家に住んでいる友達のお母さんが、

「お風呂に入りにおいで。」

と言ってくれました。そのとき、私の家は停電していて、お風呂にも入れませんでした。でも、その友達の家にはまきストーブがあり、お湯をわかしてお風呂に入ることができました。寒かったのでお風呂に入って体を温めることができました。

次の日には家の中のかた付けをしました。保育所はしばらく休みになりました。このときの震災の記おくは、今でもはっきりと心に残っています。

私は今、小学五年生となりました。他の場所では、津波の被害もあり、約二万人の人が亡くなったことが、少し大きくなってから分かりました。二〇一一年三月十一日の一しゅんの間に、多くの人の命がうばわれてしまったのです。今は、電気もガスもついているけど、電気やガスがなくなると、とても大変です。私はこれからも、震災の経験を忘れず、命を大切にして、ふだんの生活の何気ない所に感謝の気持ちをもって、人と協力しながらくらしていきたいと思います。

震災から五年をむかえて

大河原町立大河原南小学校　六年　髙野　深愛

あのおそろしい震災の年から五年が経ちました。あの日のことは今もはっきりと覚えています。

私は一年生。学校帰りは児童館に行っていました。あの日も友達といっしょに児童館へ向かっている途中でした。友達と楽しく話しながら歩いていると、小さなゆれを感じました。地面がゆれるなんて初めて体験したのでとてもこわかったことを覚えています。こわさと心細さで友達といっしょに泣いてしまいました。泣きながら歩いていたら、いつも目にする信号が道路にたおれていたのです。もうこれはただ事ではないと思い、どうすればいいか分かりませんでした。すると、横断歩道にいたおじさんが

「こっちにおいで!!」

と言って児童館まで送ってくれました。児童館に着くと先生が

「だいじょうぶだよ。」

と声をかけてくれました。とても安心しました。むかえに来てくれた母の顔を見た時、とてもほっとしました。母は病院で働いています。まだ仕事の途中だったため、私もいっしょに病院へもどりました。そこには、入院しているおじいさん、おばあさんが心配そうな顔で避難していました。母は私に

「仕事が終わるまで待っててね。」

と言って仕事に行きました。とても心細くなったけれど、母の同僚の人の娘さん達もいっしょだったので、お菓子を食べながら待っていました。母の仕事が終わり、帰宅して異常がないか確認しました。私はアパートの四階に住んでいて、何も皿とか落ちてなかったので安心しました。

その夜は祖母の家の近くの集会所で一夜を過ごしました。お風呂にも入れず、いつものふとんではないので、なかなか眠れませんでした。毛布は少なくて寒かったです。ふだんのくらしがとてもありがたいなと感じました。

私が今思うことは、みんな助け合って生きることの大切さです。下校とちゅうに、泣いていた私たちを児童館まで連れて行ってくれたおじさん、集会所でいろいろお世話をしてくれた人たち。たくさんの人たちに支えられて私たちはくらしていると思います。そして、何よりも家族の大切さです。今回の震災で、県内では九千人あまりの人が命を落とし、いまだに千人近い人たちが行方不明のままです。テレビのニュースを見るたびに、悲しい気持ちになりました。県内だけでもこれだけの多くの人たちがなくなったり行方不明になっていることがとてもおそろしいことだと思います。私の家族は幸いにもみんな無事でした。私は、周りの人たちにいつも感謝の気持ちを忘れず、優しい気持ちで接していきたいと思います。泣いていた私に声を掛けてくれたおじさんのように、次は私が困っている人を助けたいです。

あの日から四年と八ヶ月

村田町立村田小学校　六年　佐藤　拓見

多くの人の食べ物や家、命までもがいっしゅんにしてうばわれてしまったあの二〇一一年三月十一日の「東日本大震災」から四年と八ヶ月がたちました。その間ぼくは、失ったものと、そこから新しく芽生えたものがありました。

そのときぼくは、南相馬市立小高小学校の一年生。学校でお母さんの迎えを待っていました。友達としゃべったり、宿題をしたりしていました。すると、次の瞬間、「ごごごごご」という音がなりひびき、その直後に校舎が前後左右に激しくゆれ始めました。児童たちの泣く声やさわぐ声、わめく声が重なり、ぼくもどうして良いのか分からなくなり、とてもおそろしかったです。「机の下にもぐってー。」と先生の指示です。みんないっせいに机の下へともぐっていきました。ゆれがおさまると、校内全体に、高台へのひなん指示が出されました。先生たちにつれられて山の上にある学校の体育館へとひなんしました。そこで、一人一人家族の迎えを待ちました。

両親が迎えに来て、ぼくはとてもほっとしました。しかし、まだ安心している場合ではありませんでした。そう、津波です。そこで、ぼくの両親は海からなるべくはなれたおばあちゃんの家へと行きました。おばあちゃんの家ですぐさまテレビをつけると、映っていた場所はまるで地ごくのようでした。津波によって建物や車、木などがものすごい速さで流されていたのです。みんな言葉もないまま、真剣な顔でテレビを見つめていました。その日は、そのままおばあちゃんの家で一夜を明かしました。

次の日になると、またみんながテレビを見ていたのでぼくもいっしょに見ていると、ある衝撃の事実が判明しました。それは、同級生一人の死です。ぼくの住んでいた南相馬市の死亡が確認されている人の覧を見ていると、その子の名がはっきりと映っていました。ぼくはその瞬間、津波のおそろしさというものを思い知らされました。それ以来ぼくは、親に感謝の気持ちが芽生えました。なぜかというと、震災の日になるべく海から離れたおばあちゃんの家まで連れて行ってくれたからです。学校の方面には、もうすでに数十センチメートルほどの津波が来ていたのです。ぼくはそのときは一年生。その津波に巻き込まれたらひとたまりもなかったでしょう。

その後も、ひなん所での食料の調達や、自衛隊の人々からの楽器演奏、ＪＩＣＡという人々からの支えなど、多くの人からの支えを受けてきました。今のぼくは、その人々のことを考えると、感謝という言葉だけでは表せないほどの感謝の気持ちがこみあげてきます。

ぼくは、その気持ちを決して忘れずに、人々の命を大切にしていけるような人間になりたいです。そして、ぼくが支えてもらったように、他の人たちを支えていきたいです。

東日本大震災～今までの五年から未来へ～

塩竈市立月見ヶ岡小学校　六年　櫛引　優宏

二〇一一年、三月十一日、あの日、大きなゆれが日本をおそった。まだ一年生だった私は、何が起きたのか分からず、教室にかけこんで机の下にもぐった。一旦ゆれがおさまるまでの一瞬一瞬が、私には何分にも思える恐ろしい時間だった。家についてからも、頭が異じょうなほどに興奮していて、何かあせりながら、起きたことを何度も何度も確認するので、精一杯だった。当日は、水は流れない、電気もつかない、父や祖母がなかなか帰って来ないなど、いつも通りではないことにきん張し、なかなか寝られなかった。が、父、祖母が帰って来たときには、とても安心することが出来た。二日目以降も大変だった。水をくむために公園へ行ったり、食料を求めてコンビニへ行ったり、ガソリンを求めてガソリンスタンドへ行ったり、どれをするにもたくさんの人が並んでいた。それに、私は、地震がくるたび、津波は大丈夫なのと家族に聞くようになっていた。そうでないと、安心することができなかった。

私は、東日本大震災を通して、地震や、津波のこわさ、食料、水の大切さをよく学んだ。たくさんの方々が亡くなり、けがをし、暮らしに支障が出る震災。その震災を経験したからこそ、私たちには、後に生まれて来る人に震災のつらさを伝えていく責任があると思う。だが、震災から今までの五年、私は東日本大震災で学んだことを生かしきれただろうか。私は、じゃ口をひねれば水が出る幸せや、スイッチをおせば明かりがつく幸せを学んだ。それなのに、日に日に学んだことに対する意識がうすれて、今では震災前と同じようになってしまった。

私は、もう一度、あの今でもまざまざと思い出すことができる東日本大震災をよくふり返って、水、電気の大切さを改めて見直していくことが大切だと思う。思い出すのもつらい東日本大震災だが、もうあのような被害を出さないためにも、五年たった今、改めてふり返ることが大切だと思う。そして、これからは、震災で亡くなった方々の分も、一日一日を大切に、力強く生きていきたい。また、今後生まれて来る子供達に、震災のことを伝え、もう今回の震災のように、たくさんの方が亡くなり、けがをしてしまわないようにしたい。そのためにも、私は、伝える力を身につけ、様々な学習に、これからも、積極的に取り組んでいきたい。

さようなら、私たちの鶴塚校舎

名取市立閖上小学校　六年　南部　陽向

五年前の四月、私は大きなランドセルを背負って、この閖上小学校の校門をくぐりました。

あの頃小さかった私にとって閖上小学校の校舎や校庭は、とても大きく感じました。私は、早くここで勉強したいな、遊びたいなととてもワクワクしていました。

入学してからたくさんの友達ができ、毎日がとても楽しかったです。

春には運動会。秋には学習発表会がありました。季節が変わるたびに色々な行事があり、とても充実していました。

まもなく二年生になるという時に、あの東日本大震災が起こりました。津波にあい、一年しかこの閖上小学校で過ごすことができませんでした。今思うと、「本当はここで過ごしたかった。」「この校舎でたくさんの思い出をつくりたかった。」と残念でなりません。

私は一年しか通えなかったけれど、この閖上小学校は、これまでずっと閖上に住む子供たちを見守ってきました。

卒業生である私の母が通っていた頃、木造の古い体育館が校舎の東側にあり、母達の入学式はそこで取り行なわれたそうです。

タイヤでつくられた大きなロボットのタイヤ公園は、ちびっこ丸同様、子供たちにとても人気のある遊具だったそうです。

昔は児童数が多く、一学年三～四クラスあり、たくさんの教室で子供たちが机をならべて学びました。

休み時間には、何人もの子供たちが、ドッジボールや鬼ごっこをして遊びました。

この閖上小学校で過ごしたたくさんの子供たちにとって、閖上小学校のこの校舎は、思い出がいくつもつまった宝箱のようなものなのかもしれません。

今日、このお別れ会を最後に閖上小学校の校舎がなくなってしまうのは、正直とてもさびしいです。たった一年しかいなかった小学校だけど、校舎や校庭，遊具、体育館やプールすべてが愛しくて、本当はこわしてほしくないです。でもその一方で、新しい小学校と中学校ができることにたくさんの期待をしています。

これまで、様々なみなさんに支援していただき、私達は閖上小学校の子供として前に進んできました。

これからできる小中一貫校を私達の手で、地域の方々と一緒に一から素敵な学校を作っていきたいと思います。

ありがとう　閖上小学校

「感謝の気持ちを忘れずに」

名取市立ゆりが丘小学校　六年　長尾　登

震災から五年が経ち六年生になりました。一年生だったぼくにとって震災とは思い出したくない恐い記憶です。ランドセルを背負ったまま、体育館に移動した時に大津波がきました。その場にランドセルを置き、三階まで必死に階段をかけ上がりました。窓から外を見た時、船や車がたくさん流されてきてものすごく恐かったです。その後、屋上へひなんしましたが、雪がたくさん降ってきて、みんなびしょぬれで立ったままいました。

その夜は三階の図工室で家族四人と友達二人の六人みんなで画板をしき、新聞紙をふとんがわりにして夜を明かしました。次の日の朝、お父さんにつれられ屋上に行き、変わりはてた閖上の街を見ました。父は、この景色を覚えておくように強くぼくに話してくれました。その後、上ぐつをはき冷たい水の中を歩いて小学校を出ました。カメラを持った人や自衛隊の人がたくさんいて、道路の周りはがれきだらけ。船や車がころがっていてめちゃくちゃでした。名取市のバスに乗せてもらい市役所まで行きました。

市役所の入口にはたくさんの報道の人達がいて、ぼく達は市役所の外にあった水道で足を洗いました。文化会館で友達の家族と会い、その晩は一個のおにぎりを素手で食べました。それまで何も口にしていなかったので、とてもおいしく感じたのを覚えています。文化会館の和室で赤十字から配られた毛布に家族四人でくるまり雑魚寝をしました。

震災二日目にお父さんと同じ中学校に勤めている先生が助けに来てくれました。とてもうれしかったです。その先生の家にひなんして五十日間生活させてもらいました。何も無くなってしまったぼく達へたくさんの人達からたくさん支援して頂き、今、何不自由なく生活する事ができています。体育館に置いてきたランドセルは、お父さんが小学校へ探しに行ってくれて、泥だらけのランドセルを持ってきてくれました。しっかり洗って今、大事に使っています。ぼくの大事な宝物です。

五年間閖上小学校に通っていましたが、四つ下の弟が去年から通っている小学校へ今年転校しました。新しい友達もたくさんできて楽しく過ごしています。

ぼくは震災を経験してたくさんの人達に支えられて生きている事を感じました。これからは、感謝の気持ちを忘れず物を大切にし、閖上で亡くなったたくさんの人の命に守られながら人の役に立つような生き方をしていきたいと思います。

成実公が夢見た町を目指して

亘理町立亘理小学校　六年　齋藤　光希

ぼくの通う亘理小学校では、六年生になると「成実ばやし」に学校で取り組んでいて、運動会や音楽発表会などでひろうしています。

ぼくは、小学一年生の時から、毎年、音楽発表会で、先ぱい方の成実ばやしを見ているうちに、成実様とは、どういう人なんだろうと、興味を持つようになっていました。そして、ぼくが小学四年生の時、伊達成実公のお墓がある大雄寺で、八月十六日に、ご開帳が行われることを知り、見学に行きました。

その時、町の生涯学習課の方が話された、成実公についてのお話が、今でも胸に焼きついています。

「成実公が江戸時代の初期、一六〇二年に、亘理の殿様としてやって来てから九年後の一六一一年十二月二日に慶長三陸地震が発生し、午後二時頃に大津波が亘理の町をおそいました。その時、成実公も、この場所から津波にのまれた亘理の景色を、ながめたのではないでしょうか。」

ぼくは、この話を聞いてびっくりしました。その理由は、成実公が経験した慶長三陸地震が、一六一一年に起き、ぼく達が経験した東日本大震災が二〇一一年に起き、津波が到達した時刻も同じ頃で、年号と時刻が似ていたからです。

成実公は、新しいお殿様として、亘理の町にやって来て、一生けん命、町を発展させようと、張り切っていたに違いありません。そんな時に、亘理の町が大津波にのまれました。どんなに悔しかったでしょう。でも成実公は負けないで、真正面から立ち向かい、石高も二倍に増やしたり、立派な町づくりに努力を続けたことは、すごいと思いました。

二〇一一年、ぼくは、小学一年生の時、東日本大震災を経験しました。

復興はこれからも続きます。今は、江戸時代よりも、ずっと技術も進歩しています。成実公にできて、ぼく達にできないことはありません。

ぼくのお父さんのおじさんは、今、東京に住んでいて、亘理町観光親善大使をしています。そのおじさんから、

「活気ある元気な町を作るには、若い人達の力が必要なんだよ。町のみんなが元気で幸せになってほしい。」

と言われました。

今年ぼくは六年生。ついに、成実ばやしを先ぱい方から受け継ぐ学年になりました。

ぼくは、成実ばやしで歌を歌う役になりました。

『成実様の　おさめた町
　町づくりたたえて　ひとおどり』

先輩方が守ってきた「成実ばやし」と、成実公の困難からにげない精神を、しっかり受け継いでいきたいです。

成実公が夢見た理想の町をこれからも考えながら一歩ずつ努力していきたいと思います。

山元町と私

山元町立坂元小学校　六年　法理　美桜

あの東日本大震災から四年半以上がすぎました。そのとき、私は一年生でした。くわしい内容は思いだしたくないということもあってか、あまりくわしく覚えてはいませんが、多くのものが失われ、とてもつらい日が長く続いたということは、今でも頭の中に強く残っています。一緒だった友達との別れ、坂元小学校と中浜小学校の共同生活、仮設住宅で暮らす多くの人々。本当にこのまま元に戻らないかもしれないと思ったほどでした。

しかし、全国からたくさんの応援や支援をいただくことで、人も町も少しずつ元気を取り戻してきました。町の復興も進み、高速道路の開通を始め、新坂元駅や新市街地の建設など、町の人も新しい生活を思いながら、助け合って生活しています。学校の体育館やプールも新しく建て直され、今では元気に運動をしたり気持ちよくプールに入ったりしています。復興が進むにつれて、私を始め小学生みんなが少しずつ明るさを取り戻していると感じます。

そんな中、私たちは総合的な学習の時間の一つとして新坂元駅の見学に行きました。坂元に電車が戻ってくるために、毎日多くの人が働き、震災前よりも何倍もりっぱな駅がもうすぐ完成しようとしています。今まで不便な思いをしてきた私たちにも少しずつ希望が見えました。そんな未来の坂元駅を自分の目で見ただけで、町が新しく生まれ変わろうとしていることを感じ、うれしくなりました。

それだけではありません。学校から新坂元駅には歩いて行きました。その途中で多くの町の人に会いました。町の人たちは私たちに手をふってくれたり、にこにこしながらあいさつをしてくれたりしました。私は、町の人たちも元気になってきているのを感じることができました。「町が生まれ変われば、町の人たちも生まれ変われる」そう感じたしゅん間でした。

このように、山元町は元の山元町の元気を取り戻そうと、町民はもちろん復興に関わるすべての人たちの力で一歩一歩前進しています。この四年半という時間をかけて、人や町が大きく変わってきていることを最近になってようやく感じられるようになりました。

私自身も自分の目標に向かって前向きになろうと、気持ちを新たにすることができたような気がします。

これからも私のふるさと山元町の復興は進んでいきますが、「早く元の山元町に戻ってほしい」と願うだけではなく、自分にできることを考え、みんなの手でこの山元町を生まれ変わらせることができたら、もっともっと山元町が好きになり、すてきに生まれ変われるはずだと信じています。

あの日から四年

山元町立山下小学校　六年　菅野　花

私は、あの時一年生でした。帰りの会をしていると地ひびきが鳴り、教室がゆれました。私は一年生だったのでこわくて泣いてしまいました。先生も地震におどろいた様子でした。

「机の下にもぐりなさい。」

と、あわてた様子で先生に言われ、急いでもぐりました。その何分か後に放送があり、みんなで校庭にひなんしました。

校庭にひなんして待っていると、おじいちゃんとお母さんがむかえに来てくれました。ドキドキしながら家に帰ると、屋根のかわらが落ちているぐらいだったので安心しました。よかったなぁと思っていると、家の少し上の高台から声がしました。

「津波が来ているよ。早く逃げて。」

とあわてた大きな声がしました。それは先に高台にひなんしていたおばあちゃんとひいおばあちゃん、そしてお兄ちゃんの声でした。私には何が起こっているのか分かりませんでしたが、夢中で走り、ようやく高台に着きました。しかし安心したのもつかの間、その高台のすぐ近くまで津波が来ていたので、もっと山の方に逃げました。後で分かったのですが、私の家は流されていました。私の家はイチゴ農家だったのですが、ハウスも全部流されました。でも家族は全員無事でした。

その夜は近くのひなん所で、余震が続く中、朝になるのを待ちました。夜が明け、明るくなると家族全員で、家があった所の近くまで行ってみました。おそるおそる見てみると、がれきがとてもたくさんありました。安全に歩く所を探すのも難しいし、どこに私の家があったのかもわかりませんでした。

一か月ぐらいたち、近くに家が借りられることになり、そこに住みました。ある日の夜家族みんなで、もう一度イチゴを作るか話し合いました。そしてその結果、もう一度イチゴを作ろう、がんばろうということになり、毎日毎日、ボランティアの人が手伝いに来てくれました。なんとイチゴの苗をくれたのはおじいちゃんの仲間でした。毎日毎日大切に育てて、イチゴがなったのは、その年のクリスマス前でした。地震があった後に初めて食べるイチゴは、前の味と全然変わらず、とても甘くておいしかったです。

東日本大震災があって、何があっても一生懸命働く家族を見ていると、私もイチゴ農家になりたいと思うようになりました。将来、家族のように、真っ赤なイチゴでみんなを笑顔で幸せにしたいです。震災から四年がたち、今は以前と同じ面積のハウスでイチゴを作っています。四年たった今でも、たまにボランティアの人々が全国から手伝いにきてくれています。とてもうれしいことだと思います。こういった人たちのおかげでイチゴ作りが再開できました。これからも感謝の気持ちを忘れずに、良いイチゴ農家になれるようにがんばりたいと思います。

いま私にできること

山元町立山下第一小学校　六年　宮園　美友

私は今年の夏、亘理の灯籠流しを見に行きました。何百個もの灯籠が静かな海に流されて、とてもきれいでした。

灯籠の明かりを見ていると、こんなにもたくさん津波によってなくなられた方がいて、そしてその数だけ悲しむ方が今もたくさんいるんだなと思いました。私の家族はみんな無事でしたが、それは、奇跡のようなものだったなと、ぼんやり考えながら見ていました。

あの日、一年生だった私は、放課後校庭で友達とタイヤ跳びをして遊んでいました。地震が来た時、「怖い」というより「何が起きているのかわからない」という感覚でした。体育館で待っていると、お父さんが迎えに来てくれて、心の底から安心したのを覚えています。でも、その同じ頃、海沿いに津波が来ていて、お母さんもそこで水に流されていたとは、全く想像もつきませんでした。お母さんは津波が発生した時、空港の近くを自動車で走っていました。車ごと津波に流されましたが、何とか車から脱出して別の車に飛び移ったり、ビニールハウスにしがみついたりしたそうです。他にも流されてきた人と励まし合って救助されるのを待ちながら、私たち家族と会えたのは二日後でした。家族みんなが再会できた時には、安心でみんな一気に体の力がぬけました。

あれから五年目を迎え、私は六年生になりました。学校では、総合的な学習の時間に、防災について勉強しています。これまでも、学校内外の危険なところを調べて地図にまとめたり、津波や地震の仕組みについて調べたりしてきました。今年は校外学習として、山元町の新市街地の工事の様子や、町の復興がどのように進んでいるかを見学し、役場の方の話を聞くことができました。中でも心に残っている活動はマツの植樹です。私たちが三年生の時にまいたマツの種が五〇センチほどに成長したものを、防潮林として海沿いに植樹しました。林野庁の方にも手伝ってもらい一本一本、穴を掘って肥料を混ぜた土で埋めてしっかりふみ固めて植えていきました。このマツが、津波や海風などのいろいろな災害を防ぎ、人の命を守る防潮林になるんだと思うと、自然と手に力が入りました。

防潮林は保安林とも呼ばれ、風よけのかき根と一緒に使われて、古くは江戸時代から考えられていた仕組みだそうです。何百年も前から、苦労を重ねて植えられたと知り、何代か受け継いできたこの防潮林を、私たちが植える番が来たと思うと、しっかり続けて受け継いでいかなければいけないと、責任を感じました。

これから、命を守ることにつながる活動や、震災の日のことを忘れない行事など、続けていくことが大切です。私たち一人一人の力は小さいけれど、これからもできることを探し続けていきたいと強く思いました。

東日本大震災から五年　今思うこと

岩沼市立玉浦小学校　六年　松本　美玲

震災当時、私は一年生でした。その日、私は、具合が悪くて学校を休んでいました。家に三さい下の妹と母と祖母と四人でいました。母と妹は、買い物から帰ってきたばかりでした。とつぜん、地面が大きくゆれました。私は、妹をひっぱるようにして二人でリビングの机の下に逃げこみました。妹は、声にならないような叫び声を上げて泣いていました。ゆれが小さくなってからも、母と祖母が、上から私たちをおおってくれていました。ゆれがおさまってから、母が食べ物を少し持ち、四人で外に出ました。車で通りかかった人が、

「何してるの？津波がくるから早く逃げなさい。」

と叫んでいきました。一年生の私は「地震」「津波」という言葉の意味がよく分からず、いったいなにが起こっているのか理解できずに、とても不安な気持ちでいっぱいになりました。家族で玉浦中学校に避難しました。母と祖母が、外では車が全部水につかってしまったなどと津波の様子を話していて、私と妹には、

「今日、お家に帰れないかもしれないよ。」

と伝えました。私と妹は毛布にくるまり、泣いていました。不安とこわさで、あまりいろいろなことは考えられませんでした。三日ほどたって、さらに安全な市民会館にバスで移動しました。私たちの着いた場所はろう下でした。暗い所で、食事も満足ではありませんでしたが、少しずつ気持ちが落ち着き安心して過ごせるようになりました。それは、小学校の友達や幼稚園のときの友達がおおぜいいて楽しく過ごせていたからだし、母や祖母が私たちが私たちが安心して過ごせるようにいつも心がけてくれていたからでした。この震災で、たくさんのぎせい者が出ました。今生きている私たちは、ぎせいになられた方の分まで、一生懸命生きていくことが大切だと思いました。もう起きてほしくないですが、地震や津波は自然現象なので、起こることは仕方ないことです。だから、避難訓練などを通して、ぎせい者が出てしまわないようにすることが大切だと思います。玉浦小では、いろいろな訓練をしています。地震の後の津波を予想した訓練では、二階の下学年が三階の教室に避難してきます。私の教室に来る一年生は、皆きんちょうして取り組んでいます。震災の時の私のことを思い出し、一年生を安心させることが六年生になった私たちの役目だと思って取り組んでいます。また、玉浦には、大きな被害を受けた人々の集団移転でできた「玉浦西」地区があります。町開きではみんなで完成を祝いました。地区の樹木のプレートを私たちが作りました。プレートには樹木の名前と希望の言葉を書きました。

私の誕生日は三月七日で、震災の年には水色の自転車を買ってもらいました。四日後の津波で真っ黒になってしまいましたが、家に戻った後、家のそうじと一緒に家族がきれいにしてくれました。今もきれいな水色です。

あの日のこと

松島町立松島第一小学校　六年　相澤　七海

小学校一年生だった私は、ちょうど下校していて、家に帰る途中でした。友達とおしゃべりしながら歩いていると、急にガタガタと建物がゆれる音がして、立っていることができず転んでしまいました。しばらくしてゆれがおさまってきたので、急いで家まで帰りました。むかえに来たお母さんと会ったので、安心したのを覚えています。すぐに高台のホテルにひ難し、たくさんの家が水につかっている風景を見た時、ここが本当に自分たちの町なのか、信じられない気持ちになりました。

次の日、ようやく家に帰れることになりました。町中が水びたしだったので、歩いて帰ったのですが、水がとても冷たくて、泣きながら家に帰りました。家の一階がどろで真っ黒になっていました。いろいろなものがたおれていて、部屋がぐちゃぐちゃでした。私の部屋のおもちゃも、妹たちといつも遊んでいたお気に入りのドレスも真っ黒でした。どうして私の家がこんな風になってしまったのか、とにかく悲しくて悲しくて仕方がありませんでした。片付けたくても、水が出なくて何もすることができません。お父さんの経営しているお土産やさんに行くと、お店の商品がほとんどなくなっていました。もちろん、どろで真っ黒です。いつもの風景とは全然ちがってしまっていたので、とても現実として受け入れることができませんでした。

あれから、四年半が経ちました。真っ黒だったお店は、みんなでそうじをしてきれいになり、再びお土産を売ることができるようになりました。最初はあまりお客さんが来ませんでしたが、少しずつ以前のようにお土産を買いに来てくれるお客さんが増えてきました。

前と変わらない生活にもどったことで、私は地震や津波のことを少し忘れてしまっていました。けれど、まだまだ自分の家で暮らせない人もたくさんいます。四年半前は自分のことしか考えられなかったけれど、今は自分に何かできることはないかと考えられるようになりました。

今回、この作文を書くことになり、三月十一日のことを思い返しました。そして、あの経験を決して忘れてはいけないと思いました。あのとき、食べ物や水がなかったこと、電気がなかなか使えなかったことなど、日ごろ当たり前だと思っていたことが、そうではなかったということを知りました。あんなに大変な思いをしたのに、私たちは三月十一日のことを忘れかけています。被災した私たちですら、忘れてしまうことがあるのですから、経験していない人たちの中には忘れている人も多いでしょう。けれど、未だに自分のふるさとへ帰れない人たちがいるということを忘れてはいけません。あの地震や津波を経験した私たちは、これからも忘れることなく、あの時のことを話し続けていくことが必要なのだと思います。

震災を経験して今

多賀城市立多賀城小学校　四年　樋渡　那由太

ようち園から帰って来て、妹と友達の家で遊んでいる時に、あの大きな地震が来た。急いで外ににげ出し、お父さんとお母さんが来て車でひなんすることになった。しかし、

「今から大事な物を持って来る。」

と言った、お母さんを待っている間に、津波がおしよせてきた。

車に乗ったままながされ、水がどんどん入って来た。妹は泣きさけび、ぼくもこわくて声も出なかった。数百メートル流されると工場にぶつかり、こわれたまどから工場の中へにげることができた。そこで一夜を過ごし、次の日、何とか家に帰ることができた。そこで

（もう二度と会うことができないかもしれない）

と思っていた大好きなお母さんと会うことができ、

（生きて帰ることができてよかった。）

と思った。

家の電気や水道が復活するまでの間、ひなん所生活をすることになった。ひなん所の食事は固くて冷たくて量も少なかった。しかしぜいたくも言えないのでそれを食べた。トイレは共同で、部屋はダンボールのしきりしかなく、不自由な生活だった。

しかしぼくは、ひなん所生活をして学んだことがある。学校と同じように共同生活をするにはルールや当番が必要なこと。共同で使う場所は、次に使う人が気持ちよく使えるようにきれいに使うこと。食べたい時に食べたい物を食べられるありがたさ。すぐに新しい物をほしがらず、できるだけ最後まで物を大切に使うことだ。これらはあたりまえのことだがとても大切なことだと実感した。

ひなん所にはボランティアの人やスタッフの人がたくさんいた。多くの支えん物資も送っていただいた。ひ災した人や亡くなった人も多くいる中で、ぼくとぼくの家族は生き残ることができ、こうして多くの支えんを受けることができたので幸せだと思う。だから手助けをしてくれた多くの人への感しゃの気持ちでいっぱいだ。震災から五年目をむかえた今でも、不便な生活をしている人がいることを考えると、ぼくはどれだけぜいたくをしているかを考えさせられる。ぼくは、感しゃの気持ちを一生わすれないようにしようと思う。

震災を経験して、ぼくもひ災した人を助けてあげたいと思った。今の自分にでもできる小さなボランティアはたくさんある。だからまず自分にできることから始めていきたい。ご飯を残さずに食べること、家にある不要な物をリサイクルに出すこと、学校や公園のトイレをきれいに使うこと、道路に落ちているごみを拾ったり、困っている人を助けたりすることだってできる。

小さなボランティアから始めて大きなボランティアへとつながることを目指して、がんばっていきたい。

震災から五年目を迎えた自分

多賀城市立多賀城東小学校　六年　佐藤　彩芽

いつもの帰りのように、げた箱でくつにはきかえようとしていたとき、とても大きな地震が私たちをおそいました。

三月十一日の午後二時四十六分、私はその当時一年生でした。突然学校のサイレンが鳴り、私は何が起きたのかよく分かりませんでした。そしてその五秒後ぐらいに強いゆれが私たちをおそいました。

その地震が起きるまでは、「津波」というものや、こういった地震が世の中にあるということが全然分かりませんでした。だから地震に備えるということを何もしていませんでした。そんな私を突然おそってきた地震。一しゅんどうしたらよいか分からず立ち止まっていた私を、たまたま校庭の遊具の取り付けをしていた人が、校庭の方へと導いてくれました。

水が混じったような冷たい雪が降っていました。とても寒かったのを覚えています。

家に帰っても余震は続きました。それから三日くらいたったある日、私たちは秋田の祖父母の家に向かいました。秋田ではもう電気が通っていたので、テレビをつけて地震による被害の様子を見ました。すると、町や家を飲み込んでいく映像が映っていました。とても恐ろしい風景で怖い気持ちになったことを覚えています。

また、女川に住んでいた祖父母の家は津波で全部流されてしまいましたが、家族全員無事だったので私は心からほっとしました。

震災直後の私は、小さな地震でも心配になり、心がどきどきする事が多くなりました。特に、一人自宅で留守番をしているときに地震が来たときなどは、ゆれの大きさを確認するためにすぐにテレビをつけて、このまま家にいて大丈夫か、避難しなくてよいのかなどを考えるようにしていました。

地震後は、水不足で大変だった経験から、家にはペットボトルの水を常に備えておくようになりました。また、夜に地震があっても大丈夫なように、家中のあちこちに懐中電灯を備えておくようにもなりました。

今は、地震に備えて両親がインスタント食品などを買い、定期的に交換しています。このような準備をしていると地震が起きてもある程度大丈夫かなと家族も私も安心できます。

今の私は、東日本大震災のときと比べて、地震に対して少し心の余裕が出てきたように思います。ちょっとのゆれでは、あまりどきどきしなくなりました。周りの友達も、震災後は地震が起きると小さいゆれでもすぐ机の下に隠れましたが、今は、少しのゆれでは、あまり反応しなくなってしまいました。

今大事だと思うことは、学校や地域の避難訓練にきちんと参加して、余裕をもってきた心を逆にひきしめていくことだと思います。また、災害に備えて、定期的に家族で話し合ったり、防災備品をチェックしておいたりすることが必要だと思います。

震災と私の夢

多賀城市立城南小学校　五年　山田　桃音

私が五年前、地震が発生したとき幼稚園にいました。お父さんがむかえにきてくれるまでバスにひなんしていました。お父さんが来るまでの時間がすごく長く感じましたが来てくれた時はとても安心しました。それからは毎日、地震が起きるたびにこわくてしかたなかったことを今でも覚えています。

震災の年の四月に小学校に入学して九月には弟が生まれました。震災の時はおなかの中の弟が元気か心配だったけど、とても元気に生まれてきてくれました。私は、心の中で、「赤ちゃんて、こんなにかわいいんだな。」と思ったし、周りのみんなも笑顔でした。

たん当の助産師さんに、震災の時のことを聞きました。てい電して、まっ暗な中で赤ちゃんが生まれたこと、寒かったから毛布で赤ちゃんをぐるぐるまきにしてみんな順番にだっこしたと言っていました。弟が生まれた時も、助産師さんは赤ちゃんとお母さんのお世話をたくさんしてくれました。それをみて私も助産師になりたいと思いました。

助産師になりたいと思った理由は、もうひとつあります。元かんご師のおばあちゃんが仮設住宅でボランティアをしているのを見たり、話をきいたりしてです。おばあちゃんと一緒にボランティアをしていた黒田さんのことをきいたりテレビで見たからです。黒田さんは阪神大震災の時に、働いていた病院をやめてボランティアをしたそうです。世界中のいろいろなひさい地に行って、ボランティア活動をしていました。おばあちゃんも黒田さんのことをそんけいしているようでした。黒田さんの二十四時間の見守り活動や少ししかねていないのに、いつも笑顔でいて、すごいと思いました。私も黒田さんのような人になりたいです。

五年前は、まだ六歳でこわいことばかりで何もできなかったけれど、たくさん勉強して本を読んで、人の役に立ったり、こまっている人を助けられる助産師になりたいです。

地震はもう起きないでほしいけど、将来の夢が決まったのでがんばりたいです。

あとは、大好きな、おじいちゃんとおばあちゃんが住んでいる気仙沼が早く元通りにもどったらいいなと思います。

震災から学んだこと

七ヶ浜町立汐見小学校　六年　岸柳　修聖

東日本大震災、あの時ぼくは南相馬の原町第一小学校の一年生でした。もう少しで一年生も終わりの時に、大地震にあいました。あの日友達に「さよなら」も言えずはなればなれになってしまいました。その日から、福島の友達とは一度も会っていません。とても悲しいです。

原発がばく発して、放射能のえいきょうで家には帰れず、何も持たず逃げてきました。家族で七ヶ浜の祖父の家に向かいました。でも海が目の前の家なので、もしかしたら津波で流されてしまっているかと心配でした。家は、流されてなくなっていました。だけど、祖父と祖母が生きていたのでぼくはとてもうれしかったです。

七ヶ浜に来てから、住む場所がなかったので親せきの家にお世話になり、とても助かりました。でも一週間以上お風呂に入れなかったり、水が出なくてトイレが流せなかったりしました。停電のため電気がつかなくて、七時には寝なければならず十分な食べ物もありませんでした。だから、今あたりまえに電気がついたり、水が出たりすることがありがたく、節電や節水を心がけるようになりました。

三ヶ月後、ようやく七ヶ浜のアパートで暮らすことができました。何もなかったアパートには、いろんな支援物資が入り生活できるようになりました。学校は、汐見小学校に通うことになりました。初めは、友達ができるか不安でしたが、新しい友達もすぐにたくさんでき、みんな分からないことやいろいろなことを親切に手伝ってくれました。とても、うれしかったです。

ぼくは、この震災で全国の人達や七ヶ浜の人達の親切や、やさしさにたくさん助けてもらいました。だから、今度は自分が恩返しをしたいです。そのためにも、今回の経験を生かし、周りの人々と協力し合い、助け合い、震災のことを忘れず生きていきたいです。

東日本大震災後の自分を振り返って

利府町立しらかし台小学校　五年　鈴木　杏香

私は、東日本大震災の時のことを振り返り、考えました。

私は、震災の時はまだ六才でした。そのころ石巻の幼ち園に通っていました。地震が起きた後、私は何がどうなっているのか意味不明でした。でも、だんだんこうやって自分が成長してくると、その意味不明な部分が恐怖であったということが分かってきました。私が住んでいた町は津波におそわれました。そのため知り合いに紹介してもらい利府町に来ました。振り返ると、いろいろなことがあったのだなぁと思いました。

私は東日本大震災のことは絶対忘れてはいけないと思います。なぜなら、東日本大震災を忘れようとするということは、亡くなった人に失礼だし、亡くなった人のことを忘れることになると考えたからです。亡くなった人は思いを残して亡くなられていると思うからです。

私は、こんな怖い地震を経験したのは初めてでした。私の家族はだれも亡くならなくてよかったです。

そして、これだけはすべての人に言いたいです。それは、「たとえ、家族とケンカをしたとしても、家族は絶対に大切にしたほうがいい。」ということです。そのわけは、家族が亡くなるととても悲しくなるからです。

これから、地震に備えて私に何かできることはないか考えていきたいと思います。亡くなった人がうれしく思うようなことをしたいと思っています。